

『ジッドとその時代』（吉井亮雄）

「ジッドがドイツと結んだ関係はほかのどの外国とのそれよりも深く密接であった」、とアンドレ・ジッド研究者である同僚の吉井亮雄氏（仏文学講座教授）は近著『ジッドとその時代』（九州大学出版会、2019年）において記す。実に興味深い指摘ではないか。

同書によれば、フランス現代文学を代表するジッド（1869-1951）は、ゲーテやクライストやニーチェなどを若い頃から読んでおり、そして実際にドイツやオーストリアの作家や思想家と親しく付き合うことで、ドイツ語圏に対する親近感を深めていたようである。

吉井氏は、ジッドに関連する手稿や刊本の精密な比較照合を通じて、これまで文学テキストの生成過程を厳密に追ってきた。今回の著作でも、未完の書簡や同時代の新聞や雑誌の記事を緻密に調査することで、多岐にわたるジッドの交友関係を明らかにしたのである。

ドイツ語圏におけるジッド作品の翻訳紹介は、ウィーンの思想家 R. カスナー（1873-1959）が 1904 年に訳出した『ピロクテテス』が嚆矢であった。また、数多くの独訳の中でも、カスナーの友人であるリルケ（1875-1926）が訳出した『放蕩息子の帰宅』も秀逸であったようだ。

ジッドが 1911 年にリルケ『マルテの手記』の部分訳を出したこと、1925 年に遺稿出版されたカフカ『審判』を 1947 年に演劇版翻案として出したことなどは、ドイツ文学者の間でもあまり知られていない。なお、同年はジッドがノーベル文学賞を受賞した年でもあった。

ジッドは、ホーフマンスタール（1874-1929）の他に、トーマス・マン（1875-1955）とも付き合いがあったようである。1921 年には、第一次世界大戦後にも尾を引く独仏の諍いを超えて、ジッドとマンは「コスモポリタンの精神」によって交友を深めていた。

もっともそこにエルンスト・ベルトラム（1884-1957）が加わっていたことも、忘れてはならない。当時、ベルトラムはニーチェの研究者として活躍し、1922 年からはケルン大学の教授であったが、後に民族主義的傾向を強め、ナチスに同調したことが知られている。

なお、マンが 1920 年にベルトラムに宛てたクリスマスカードが九州大学附属図書館の貴重書室に保管されていることも付言しておきたい。吉井氏から浩瀚の書をいただいたとき、ドイツ側の複雑な経緯と九大が所有するマン書簡のことを思い出したのである。（独文学講座教授・小黒康正）

